

平成22年度農林水産試験研究事前評価(平成22年10月27日開催) 結果

番号	機関名	課題名	研究期間	研究概要	総合評価	評価委員コメント
1	水産総合センター	いしる加工残滓有効利用事業	H23～25	いしる加工残滓を利用した天然調味料の製造技術を開発する。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・処理費用がかかっていた加工残滓が有効活用出来れば一石二鳥である。旨み成分のある天然調味料は、加工業者からも期待されているところであり、石川県のみならず県外からのニーズに応える先駆けの研究になると思う。 ・面白い着想と思います。 ・加工残滓の有効活用としては評価できるが天然調味料の風味と価格を含め未知数であるが実用化に期待したい。 ・低塩分化が出来れば多様な商品の開発につながるのではないかと期待したい。 ・調味料製造に用いることのできる量、コストと残渣処理料金のバランスはどうなっており、どのくらいの産廃を減らせるのか。 ・50%減らす目標とあるが、75t分を調味料にして販路は確保できるのか。 ・調味料以外の活用は想定しているのか。 ・実用的意義は認められる。 ・目標が明確であり、実現後の効果も期待できる。 ・石川県の今後の特産物として期待します。
2	林業試験場	森林整備活動が生物多様性に与える影響と評価	H23～25	積雪地である石川県での森林整備活動が、植生を中心にした生物相に与える影響を明らかにし、生物多様性に配慮した森林整備活動について検討する。	C	<ul style="list-style-type: none"> ・生物多様性の維持は国際的にも重要な課題となっている。この研究が石川県においてもその方向性を探る大きな足がかりとなる事を期待する。 ・重要な課題であるが、どういう視点から多様性を評価するかが問題。 ・意義は大いに理解できるどころだが、県民ニーズは「熊との共生」が最優先すると考えられる。 ・テーマが大きくて基準となるものもないが、必要なものである事も事実で、出てくる結果に期待したい。 ・調べて分かったことをどう利用するのか分からず、目標が曖昧な印象を受けた。「生物多様性」の何に注目してどうしたいのか分からない。 ・調査の結果、多様な生物の所在や数、分布などが把握できた時、単に、数が多ければ良好と判断するだけでは県が行う事業としては物足りない。森林環境の内側の評価だけでなく、外との関わり、県全体、地球全体の中での森林の位置付けをしないといけないと思われる。 ・林業のこのことのみ考えても、環境学習や余暇活動のみ考えても片手落ちではないかと思われる。他の森林政策とどう結びつけるのかを明確にしたほうが良いのではないかとと思われる。 ・どういう物差しで多様性が保たれているか否かの評価をするのか分からない。また、それを県民の皆様に理解してもらうための手立てはどうするのか。 ・これまでの政策実施の成果としての現状把握はできるが、それらをする以前のデータがなければ政策の効果影響の判定や政策改善の検討が想定しているほど実現できない可能性もあるような気がした。 ・「植生」調査だけで多様性の判断は困難なのではないかと思う。 ・業として成立するためには、業が行われている社会環境の中での業の成立にも配慮しなければならないと思われる。業としての社会的責任をどう考えているのか。 ・有意義であるが漠然としている。 ・評価をどう行うのか疑問。テーマが大きいのでは国レベルのものではないか。 ・本研究テーマは、今後の森林保護や生態系の研究について必要になることを期待します。テーマが大きすぎると思いますが継続することが必要になると思います。
3	林業試験場	県産スギ材を活用した接着重ね梁の長尺化・高品質化技術の開発	H23～27	従来取り組んできた接着重ね梁の技術を発展させ、県産スギ材に対応した重ね梁の長尺化と表面割れを防ぐ技術を開発する。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・県産材利用を促進する上で、接着重ね梁の長尺化・高品質化技術の開発は新たな需要を生むと考える。 ・大径材が生産される可能性もあるので、その利用も考慮してほしい。 ・今後も間伐材が多く出てくる現状を考えると必要ではないか。ただ、接着剤、木表木裏、水分量、ねじれ等の問題もあり、長い目でみる必要がある。 ・横架材に限らず多様な建築場面を視野に入れて応用できないのか。また、コスト圧縮も同時に考慮し、技術開発をすることにより県産材や間伐材利用の可能性を広げることができると思われる。 ・長期的な耐久試験はしないでもよいのか。そうであれば5年で結論が出せるのか。 ・開発後の効果が期待できる。 ・接着の部分に課題があるが、今後の研究に期待。
4	畜産総合センター	おいしい能登牛生産技術試験	H23～25	牛肉脂肪中のオレイン酸の含有量が、口触りの良さや風味と高い相関があり、「おいしさ」を表す指標として注目されており、最近ではオレイン酸の高い牛かどうか遺伝子型により判定する方法が確立されつつある。そこで、オレイン酸割合と遺伝子型に基づいた能登牛の生産システムを確立し、おいしい能登牛の生産を図る。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・おいしい能登牛生産のマニュアル化は、肥育農家や繁殖農家にとって待たれることであり、遺伝子型を元にした繁殖基盤の強化には県の関与が必要であると思う。 ・評価基準そのものを見直すような研究をすべきた。今の基準は魚の刺身の基準ではないのか。 ・少なくとも県内での取扱量の増加につながることを望みたい。 ・農家間など異なる技術の差をなくす努力が必要である。 ・「農家間の格差縮小」を実現するための具体的な体制はどうなっているのか。単にマニュアルを作って各農家に配布するだけでは実現が難しいのではないかと。各農家の活動実態の把握と分析を同時に行って、牛そのものの質の向上に関する研究成果と組み合わせ、それぞれの農家が参加しやすい手法の開発や活動支援も検討しなくてはならないと思われる。 ・均一化された特性の牛の集中飼育が長期的にみたまにマイナスの影響が出る可能性はないのか。石川県の牛の特性を変えずに別の物差しで「うまい」、「良質」と受け止められるマーケットの開発もあってほしいと思う。もちろん、畜産総合センターの立場としては、現状のメジャーな物差しにそうことを求められる部分があってもしるべきと思うが、ある程度多様なカードを持っておくことの方が長期的なリスクや可能性への対応は柔軟にできると思われる。 ・ブランド化のために品質向上は必要不可欠である。 ・能登牛のブランド化を高めるために有効であり、能登牛生産拡大につながるものと思われる。 ・高品質な能登牛を求められる中、まずは県民へのアピールや宣伝が大切だと思う。

番号	機関名	課題名	研究期間	研究概要	総合評価	評価委員コメント
5	農業総合研究センター	奥能登における休耕地削減のための作物導入技術の確立	H23～25	農地開発地の休耕地におけるワラビ、フキなどの山菜園の省力・早期造成管理法、クリの一挙成園化技術、赤土の特性を活かした部分土壌管理法を開発する。また水田の休耕地では、カラーやノゼリなど水性作物の簡易で省力的な栽培法や景観作物を活用した土壌管理法を確立する。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・奥能登の過疎化対策という点においても、農業参入企業の休耕地の有効利用は不可欠であり、山菜・果樹の導入技術の確立によって参入企業も増え活性化につながると思う。 ・色々なアイデアがあって面白い。ギョウジャニンニクについては、県立大学の鈴木正一とも相談してください。 ・雨樋やチェーンポットの利用は良い方法だと思います。今後に期待。 ・高齢化の進行が著しい能登地域の農業従事者の特性を考えた時コスト負担と労力の削減が見込みやすいもの、比較的收入が良い作物に対しては研究推進が望まれ期待されるものであると思います。山菜については対象として可能性が高く、活動の価値は高いと思われるが、同時に販路の確保も考慮されると良いと思われる。 ・水田対策については、ここでイメージされている「景観作物」は誰にとつての「景観」を想定されているのかよくわからない。景観をつくり出すということは、それを利用する人がいるということが考えられるのだが、その準備もしているのか。眺めるだけでない蕎麦のようなもので多角化する方がいいのかもしれないと感じた。 ・特にクリについては、生産量が減っている中「能登クリ」のブランド化を護るためにも研究の必要性は高い。 ・休耕地に歯止めをかける対策として、企業参入の推進は不可欠になります。耕作しにくい奥能登地区での技術開発に期待します。
6	農業総合研究センター	いしかわ園芸オリジナル品種育成研究	H23～27	石川県における園芸作物オリジナル品種の育成を目的として、フリージア及びビナンの新品種育成を行う。また、新手法としてDNAマーカーを利用して、中島菜のネコブ病抵抗性系統の育成を行う。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・石川県独自のオリジナル品種を園芸作物において育成することは差別化という視点からも大変重要である。生産者レベルでは取り組みが難しいので県レベルの関与が必要であると思う。 ・マーカーを利用した手法は実証試験を伴わなくて大丈夫か。 ・中島菜については、早急に根コブ病対策をするべきだと思います。 ・フリージアに関しては全国的にみても先進県たりうる技能と素材を持っていると思うので、その優位性をさらに強固にできるような品種の幅を広げられるよう期待している。 ・石川県のオリジナル品種を育成するための試験研究は継続的に必要であると思う。 ・アブラナ科にとって、根こぶ病は困難な病気の一つで耐病性中島菜の確立とともにその他のアブラナ科作物の対応にも期待します。
7	農業総合研究センター	大規模経営を進展させる土地利用型作物の栽培技術の確立	H23～25	大規模経営体向けの省力低コスト技術として、水稻の疎植栽培による超低コスト技術の検討を行う。また規模拡大や販売戦略への対応として、コシヒカリの超晩植適正生育指標の策定や、水稻晩生品種、他用途米品種、豆腐用大豆新品種を選定し、それらの栽培技術を確立する。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・食料自給率アップおよび農業の活性化には大規模経営を進展させる施策が重要であると思う。 ・植栽密度試験は昔からやっているのではないかな。 ・水稻で私は10年前より1坪当たり35株植えで田植えをしていますが、収量は60株植えと変わりません。しかし、それには葉の色が濃くても補肥料する事です。 ・用途を特定のものに絞って、そこで特質が発揮され優位に立てるような品種をいくつか準備できないのか。例えば、冷めてもうまい、おにぎりには抜群に向いているなどといったようなもの。 ・大規模栽培普及でなくても、県内の各地域の事情に応じて品種や仕向けを多様化させればよいので、中山間地域の小規模農業活動と平地の比較的大面積での農業活動で目指すところを変えればいいのではないかな。 ・少量生産であっても、専門化された生産とニッチ市場対応で可能性が開けるところもあるのではないかなと思われる。 ・確かに強い農業地域を作るためには大規模農業の拡大改善も必要だと思うが、開発の応用として県内全体にメリットのある成果還元も配慮があってもよいと思う。 ・特に大豆における実需ニーズに対応した品種選定についての試験研究の成果に期待する。 ・今後、米価の下落はやむをえず、コスト削減・省力化技術の確立に期待します。
8	農業総合研究センター	主要野菜産地を支援するための安定生産技術の開発	H23～25	施設野菜の主要品目であるトマトの夏秋どり安定生産に向けて、裂果防止のための果実への直射光軽減技術や、地温低下技術を開発する。また露地の主要品目である白ネギの夏どり安定生産に向けて、湿害防止のための平床式定植法や広うね・2条植え定植法を開発する。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・生産現場が簡単に取り入れやすく、低コストで出来る安定生産技術となるよう期待する。 ・メカニズムをしっかりと見極めて対策を考えてほしい。 ・トマト、ネギの対策案に期待。 ・散光性フィルムにした時のトマトの発色度への影響、栽培日数、手間などへの影響はどれくらいあるのか興味があった。また、長ネギの温田転作の手法のところでは二条植、籾穀などの活用のおね土寄せ作りというのにも興味がある。最終的には農業者の作業効率、コスト負担、高齢化対応なども考慮しながら導入の可能性を評価する必要があると思う。 ・トマト、ネギとも県の主要品目であり、生産拡大を図る必要がある。その為には、安定生産技術の確立が不可欠と考える。 ・近年、猛暑や異常気象が続く中、夏秋トマトが栽培しにくくなっている現状、新たな技術開発が求められる本研究において生産量、品質の向上を期待します。
9	農業総合研究センター	水稻・大豆病害虫の簡易発生予測システムと減農薬管理技術の開発	H23～25	水稻ではファージの活用による農薬代替種子消毒技術やケイ酸の少量施用による種いもち防除技術を開発する。また水稻の紋枯病やクモヘリカメムシについて、見歩き法やフェロモントラップの利用により防除要否判断システムを開発する。大豆病害虫について、発生程度と被害の関係を解析することにより防除要否判断基準を作成し、減農薬防除体系を確立する。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・簡易発生予測システムの開発、農薬代替技術の確立は環境保全型農業の推進にとって重要な課題であり、県が関与する必要性が大と考える。 ・ファージの探索に力を入れるのが良いと思います。 ・私としては稲わらが必要なので紋枯病の対策を考えてほしい。 ・事前に害虫の行動や分布範囲を予測して必要最低限の防除のための農薬散布が効果的に行われるようになることは望ましいと思う。ある程度、経年的に調査を積み重ねて精度を上げる必要もあると思うと同時に地形や気象条件との兼ね合いもあると思う。3年間ですべてを解決できないと思いますが、中長期的な活動の目処やおおよその対応は示してもらえればよいと思う。 ・農業防除回数を減らすことができ実現できれば、省力、低コスト、環境に有効となるが、十分な検証期間が必要と考える。 ・病気の発病を抑制するファージと病気が発病した場合の予測システムにより、次世代管理技術の開発の確立を期待します。
10	農業総合研究センター	主要野菜の難防除病害虫防除技術の開発	H23～25	スイカ炭疽病の発生源の解明や蔓延防止対策、効果的な薬剤防除法を開発する。またトマトの $3\text{Ca}^2+\text{P}^2\text{M}^2$ の簡易薬剤検定法の開発や伝染環の解明、トマト青枯病の抵抗性台木の高接ぎ技術等の検証により、難防除病害虫の効果的な防除技術を開発する。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・環境に優しい農業を目指すという大前提のもと、効果的な難防除病害虫防除技術の開発に取り組むこれらの研究は、産業界、県民のニーズに十分応えるものであると思う。 ・難防除ということになればチャレンジングな課題として研究者が取り組みやすいような研究体制を作ってほしい。 ・私の家でもトマトの青枯病で困っております。できるだけ早く対策案ができるようお願いいたします。また、中島町ではスイカの炭疽病が出ておりました。 ・スイカ対策に関しては、1農家・畑だけでの問題にとどまらず、活動意欲や収益、廃棄発生対策など作業効率への影響も大きいので早期に効率の良い管理手法を打ち出せることを期待する。 ・野菜産地からの要望であり、研究の意義がある。 ・県の園芸産地で抱える大きな課題であることから、研究要員、予算などを充実して対応してもらいたい。